
コーヒー

遊己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「一ヒー

【著者名】

Z6546A

【作者名】 遊己

【あらすじ】

サイフォンの中に世界を思い浮かべながら。とある喫茶店の、夫婦のお話です。短いし簡単です。よろしければどうぞ。

喫茶店で働く私。

何もない本当に普通の喫茶店。

サイフォンで淹れるコーヒーを淹れて

「ビババ」とお姉さんに出す。

サイフォンで淹れるコーヒーの中の世界がある。

一つ一つの動作が美味しいと言わせるコーヒーを作る。

フランソからロートへ水は動き、コーヒーの味と香りを携えて再び
フランソへ帰ってくる。

何の脚色もされていない水も素敵だけど、

何ともいえない味と香りをフランソされて帰つてくるこの水はむつと
素敵。

そしてそれをお姉さんに出す時、

お姉さんが「おいしい」とつてくれた時

私はいつも幸せな気持ちになれる。

何だか私の世界を肯定してもらえたような

そんな気持ち。

こんな喫茶店の店主が旦那になつたのは、もつゞれ位前に事だらうか。

この店の略で、店の雰囲気とコーヒーが気に入つて毎日のように通つた。

レポートや資料つくりなんかもみんなこの店でやつてた。
わざわざノートパソコンを持ち込んだりして。

毎日毎日通つて、気が付いたら店主に告白されてた。
10以上も年上。

でも、迷つた覚えはない。

こんな店の雰囲気がつくれるのなら・・・

そんな人なら上手くやつていけるような気がして。
実際結婚して5年。何だかんだとケンカはあるものの仲が良い方だ
と思う。

2年かけて同じ味のコーヒーが淹れられるように仕込んでもらつた。
私もコーヒーを淹れてみたかった。

ふんわり漂つてくる香ばしい香り、最後には綺麗に山形になるコー
ヒー豆。

初めて綺麗にできた時は本当に嬉しかつた。

今ではこれは私の仕事。

というかそれ以外はほとんどメニューがない。
うちのメニューは

コーヒー、ミルク

以上。

紅茶やらジュースなんものは一切ない。

コーヒーは一応こだわつてゐるが、他の喫茶店と大差ないのかもし

れない。

ただ、なんとなく美味しい。
ほっとする。

安心する。

この店はそんな評判を常に頂いていて、ローハードのみで広まつた奇特な店なのだ。

最近旦那は店にあんまり顔を出さなくなつた。

「もう、この店は俺の店じゃなくなつた

とか言つて。

確かに私が入つてからは旦那がしていた店の雰囲気とは微妙に違つてきた。

私が来てから、花を置き、トイレの空氣も何だか前とは違つようになつてゐる。

他にも細かい部分で、何だか違つ。

旦那はそれが気に入らない。

自分のテリトリーに入られるのが気に食わないのかもしれない。
彼から告白されたけれど、この店に入れと言われてはいない。

私が勝手に入つてきたのだ。

そして、私はきっと勝手にこの店を彼に色から私の色に染め替えてきた。

きっとここが原因なのだろう。

いつの間にかケンカが絶えないようになつていつた。
どちらからともなく言い争いが始まつて、

時には暴力にまで発展した。

些細な事。

本当にケンカの原因は些細な事なのかもしれない。
でも、何だか許せなくてついつい怒鳴り散らしてしまつ。

その頃から店に客が来なくなつた。

田那が「ほら見る」と言わんばかりの顔で私を見る。
悔しくて躍起になればなるほどお客は逃げるかのように走つて行つた。

もう、いじは落ち着く店じやなくなつたのかもしれない。
店員がモヤモヤしているような店じや、お酒をささげともう、和めなくなつてしまつたんだ。

1年間位、田那と喋らなかつた。

話せばケンカになるから。

家庭内別居。

まさかじぶんがこんな事になるなんて思いもしなかつた。

虫睡が走る。

田那の顔を見ると。

一緒にいる事さえイヤになる。

同じ空気を吸つているとと思うだけで息を止めたくなつた。

そんな生活をよくも1年も続けられたと思つ。

こんな生活をしていても、コーヒーを淹れる時だけは心が穏やかになつた。

コーヒーを淹れている時だけ、私の心に平穏が訪れる。
イラつく時ほど私はコーヒーを淹れた。

誰に淹れるでもない。
何となく淹れた。

旦那が1年位経った時から、また店に顔を出すようになってきた。
何となく私が淹れたコーヒーを何となく旦那が飲む。
何も入れずにブラックで、のんびりと。
何を話すわけでもない。

私がゆっくり淹れたコーヒーを
旦那がゆっくりと飲み干す。

そこには無言の会話が成り立っていたんだと思う。
離れかけた心が、徐々に近づいていくような気がした。

「たまには俺が淹れる」

と突然言い出したのはそんな無言の会話が始まつてどれ位経つてからだろうか。

そんなに短くない時間が過ぎた頃、旦那が急に口走った。

徐々に・・・

本当に少しずつ私と旦那の間に会話が戻ってきた。
それと共にお客様も戻ってきた。

昔どおりの店というわけではないけど

昔の店みたいな雰囲気はもう作れないので
今は私がしていた時の店の雰囲気ともまた違つ
新しい雰囲気が店に漂う。

長く掛かってしまったけど二人で作った雰囲気。
どちらか片一方では作り得ない雰囲気。

その雰囲気の中今日も私はコーヒーを淹れる

サイフォンの中に旦那との一人の世界を思い描いて。

(後書き)

つたない文章、最後まで読んで下わつありがとびげれこます。
よひしければ評価などじつやつて下わこ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6546a/>

コーヒー

2010年11月27日19時49分発行